

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

ひぐらしや一日二便だけのバス

東谷 晴男

(評) ひぐらし(蛸)は蝉の一種で、全長約5cm。雄の腹部は大きく半透明で共鳴器となる。夜明けや日暮れに高く美しい声で「かなかなかなかな」と鳴くので「かなかな」とも言う。涼しい山地では日中でも聞かれる。「一日二便だけのバス」とは、山々に囲まれて利用者の少ない地域では詮ないこと。交通機関の便利な街人には分からない別世界。奥深い山里、鄙びた田舎、あるがままの自然、山や川、草木の「ひぐらしの里」の風景が浮かぶ。この句により山里の現実がよく見え、里人の生活を思ふ作者。季語(ひぐらし)が効果的な調詠。

根付きたる風蘭夕べ匂ひけり

津田 久美

(評) 風蘭は暖地の山中で、老樹に着生する野生蘭の一種で、山から採取して鉢に植えたり、老幹につけ栽培して観賞する。細長く厚い葉が根元で抱き合うように互生(一枚ずつ方向を変えて生ずる)し、7月頃葉腋から花茎を出し、白い数個の花が開く。花の直径は1cmぐらいで、芳香がある。作者はこの風蘭を鉢に植えて大切に育てた。根付かせるのはなかなか難しいと思われるが、丹精の甲斐があり見事に根付き、今年も可憐な白い花を咲かせ、昨夜はその芳香にも出合えた。植え付けから開花、香りまでが確かな省略により、一句に凝縮され、実感のある香り高い作品。

虫干しやいくばく着れる眺めおり

森岡 照月

(評) 虫干しは土用の晴れた日を選んで、衣類や書籍、書画の類を風通しの良い所に陰干しにし、カビや虫などの害を防ぐために行う。また土用干しとも言う。作者は大事に仕舞っている衣類を部屋いっぱい広げて干し、その一枚一枚にある悲喜交々の記憶が甦り、しばらくは懐かしい思い出に浸りながら眺めていたが、ふと現実に戻り、さて、あと何年生きてこの服が着られるか疑問を抱く。現在は元氣澁刺

刈谷 志津選

であるが、歳月の流れは速い。人生は次第に老いのコースへと移行していく。人の寿命は神様にしか分からないと、ある医師が言った。せっかく虫干しもした衣服、これからも長く着用してご活躍されることを願ってやまない。

入選

神の火を恐れぬ驕り原爆忌

大川 節弥

家族みな笑いの渦の西瓜割り

竹崎たかひろ

故郷よ離れて永し雲の峰

岡村 嘉夫

滝しぶき浴び癒さる、一日かな

小野川町子

内へ外へ聞待つ子等の庭火花

國田 貞子

焦熱の終戦の日の風熱く

渡邊ゆかり

バテ気味の昼餉に冷し焼なすび

川村 博子

川鶴とぶ水すれすれにぐみの花

片岡 包女

一句抄

外国に記憶遙かにアロハシャツ

渡邊ゆかり

君もいた遠き古里盆踊り

大川 節弥

あの嵐尻尾に秋を連れてくる

竹崎たかひろ

一つ葉に日向日陰を司どる

片岡 包女

朝まだき浅き夢見し蝉時雨

岡村 嘉夫

金魚買ふ鹿の子の帯もひらひらと

國田 貞子

軽やかに老の身くるり寝莫座かな

小野川町子

くちなしの花の香りも投函す

川村 博子

山退り空を広げて秋となる

刈谷 志津

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町170001

☎89331922

有料広告

医療法人 森木病院
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析